

阿蘇における野焼き支援ボランティア事業は新型コロナウイルス感染症にいかに対応したのか

竹内亮 福岡女子大学国際文理学部環境科学科 講師 メール：ryo.takeuchi@fwu.ac.jp
嶋田大作 龍谷大学農学部准教授

本ポスターは竹内、嶋田（2021）「阿蘇における野焼き支援ボランティア事業は新型コロナウイルス感染症にいかに対応したのか」『環境経済・政策研究』14巻1号、P.16-20.を学内発表向けに編集したものである。

1. 研究の目的と背景：コロナ禍で阿蘇の草原（とナデシコ）が危機に！？

本研究の目的は、**新型コロナ禍が阿蘇草原保全ボランティア活動に与えた影響**を明らかにすることである。

阿蘇草原は、毎年春に**野焼き**を行うことで、**草原環境が保全**されている。しかし近年、**地域住民だけでは野焼きの実施が困難**となっている地域がある。そうした地域は福岡を含む他地域からの「**野焼き支援ボランティア**」が支援を行っている。

2020年の**コロナ禍**では、人の移動や活動が大きく制限された。支援ボランティア、それに支えられる野焼きにも大きな影響が生じる懸念。

コロナ禍で**野焼き支援ボランティアは中止？無理？**

福女の校章でもある
(カワラ) ナデシコ
阿蘇草原に群生している！



開けた草原等に群生するが、年々そうした環境が失われている。
阿蘇草原保全はナデシコ保全になる。



2. 調査内容

インタビュー(2020/08/6)

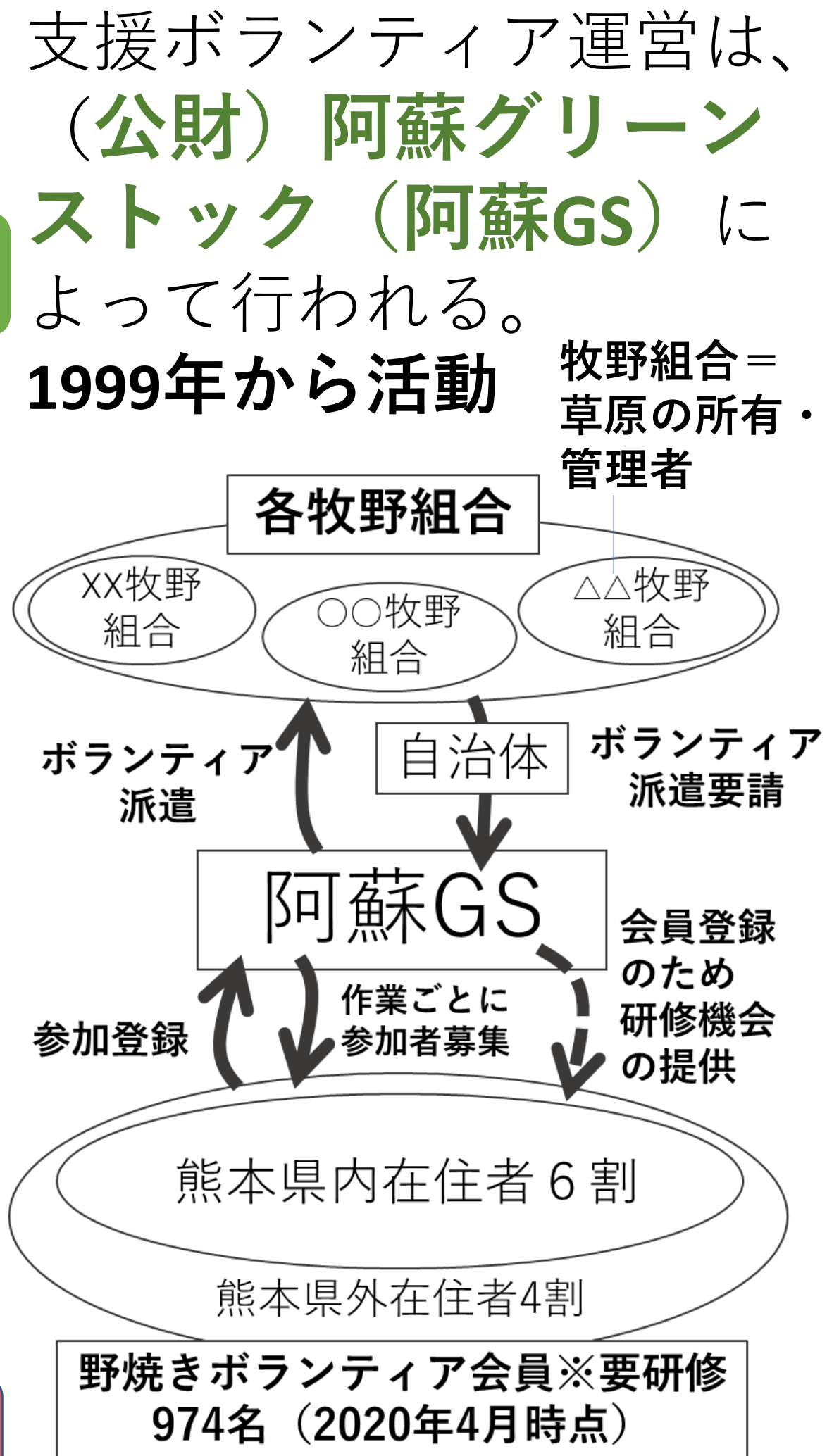
内容：阿蘇GSの「支援ボランティア」担当者へのzoomを使ったインタビュー
目的：2019年度の活動概況の把握と、現時点でのコロナ禍での活動方針の確認。

内部資料分析(2020/09-)

内容：「支援ボランティア」事業に関する会議の議事録等、内部資料の分析。
目的：コロナ禍における活動継続に向けた論点と意思決定プロセスの確認のため。

参与観察（中心的手法）

内容：野焼き支援ボランティアに実際に参加、観察を行う。2020年度に5回の参与観察を行った。
目的：実際の活動においてどの程度感染リスクが生じるのか、現場ではどのような対策、参加者による懸念があるのかを確認する。



3. 結果

インタビューの結果：2019年度の野焼きは、コロナ禍が本格化する前に重要部分を終えたために大きな支障はなかった。しかし、2020年度9月からの活動において県外からのボランティアが参加できなければ、野焼き実施は困難である。
→参加してもらおう方向で調整中。
→活動にとって**コロナは重大なリスク**となることが示唆。

資料分析の結果：

支援側のボランティアをまとめるリーダー達は、8月時点で県外在住者は慎重な姿勢。受け入れ側の牧野としても、県外からの参加者受け入れには慎重。
→意思決定機関であるボランティアリーダー会議では感染リスクの管理が可能と判断し、**状況を見つづ県外者を受け入れて活動実施へ。**

属性	回答	参加を考えている	今回は見合わせる	状況次第で判断する
県内在住リーダー (N=53, n=37)	30名	2名	5名	
県外在住リーダー (N=21, n=11)	4名	3名	4名	

出所：「今期の活動参加意向についてのリーダーへのアンケート」(阿蘇GS内部資料)より筆者作成。

質問	回答	気にしない	状況次第では不安
新型コロナの影響下でボランティアがくることについて	18組合	4組合	
県外からの支援活動参加について	11組合	11組合	

出所：「新型コロナウイルス影響下の支援活動について牧野組合へのアンケート」(阿蘇GS内部資料)より筆者作成。

参与観察の結果：→4.考察で判断理由を説明。
2020年度の野焼き支援ボランティアは例年通り、県外からのボランティアを受け入れて実施することに。全ての参加者は集合場所まで自家用車で移動、現場での感染リスク(3密)は、現地作業場所への移動時など**非常に限定的**であった。また現場における体温チェックなどのリスク管理も行われていたことがわかった。

4. 考察：平常時のリスク管理体制構築の重要性

野焼き支援ボランティアは、阿蘇GSを中心とした**高度なリスク管理システム**があったため、コロナ禍に援用できた。その理由は...そもそも「**野焼き支援**」そのものが**リスクを伴う行為**のため。(過去の事故に基づきリスク管理を毎年改善。)

既存のリスク管理体制

①阿蘇GSというコーディネーターの存在 ・全参加者に情報を同時共有。 ・受け入れ側と参加側の調整 ・行政との情報交換と連携	②高い組織力 ・リーダー制度と定例会(参加側)、 組合長と総会 の存在(牧野側) ・講習制度の存在、現場作業時の安全点検・信頼関係	③柔軟性のある組織 天候不順による活動日程変更が前提(集合後でも)。 あくまでボランティア なので自己判断でやめることが可能
--	--	---

→ **新型コロナによるリスクへの対応**

受け入れ側と参加側の双方の 意見を調整、合意形成 。行政への活動の連絡	参加者の現場でのコロナ対策への 信頼感 合議での感染リスクの冷静な判断	受け入れ側や 地域社会 の県外からの活動参加への 理解	「開始後に 状況次第での活動判断 」という、理想的だが運営側にとって 負担の大きい決定 が可能に。
--	---	---	---

前提：屋外で距離をとっての作業なので感染リスクは低い。

考察

平常時のリスク管理体制構築の重要性が改めて認識される機会となった。

研究の意義

本研究は新規性、速報性の高いものであり、今後出てくる同テーマの研究をリードし、その比較対象となる。

研究の課題

一般性を明らかにすること、コロナ終息後の変化分析に向けた継続的調査。

参考文献
横川洋・高橋佳孝編著(2017)『阿蘇地域における農耕景観と生態系サービス』農林統計出版。